

各関係機関長 殿
病害虫防除員 殿

徳島県立農林水産総合技術支援センター
病害虫防除所長
(公印省略)

平成26年度農作物病害虫発生予察情報について

平成26年度農作物病害虫発生予報第10号を発表したので送付します。

平成26年度農作物病害虫発生予報第10号

平成26年11月4日
徳島県

I. 野菜

冬春トマト

疫病

1) 予報内容

発生量 平年並(前年並)で、発生程度は「少」

2) 予報の根拠

(1)10月後半の巡回調査では、発生を認めていない(平年同時期は、発生圃場率が2.0%、発病度が0.1)。

3) 防除上注意すべき事項

- (1)窒素質肥料を過用すると茎葉が軟弱となり発生しやすくなるので、肥培管理に注意する。
- (2)罹病葉は伝染源になるので、できるだけ早く摘み取って、ハウス外で処分する。
- (3)病原菌は気孔から侵入するので、薬剤散布は気孔の多い葉の裏側を重点的に行なう。特に、下葉には丁寧に散布する。
- (4)病原菌が侵入してからごく短期間で発病するので、発生を認めたら散布間隔を短縮して、集中的に薬剤散布を行なう。

オンシツコナジラミ

1) 予報内容

発生量 平年よりやや少なく(前年よりやや少ない)、発生程度は「少」

2) 予報の根拠

(1)10月後半の巡回調査では、発生圃場率が22.2%、寄生葉率が0.4%で、平年(37.9%、4.6%)よりやや低めの発生である。

3) 防除上注意すべき事項

(1)多発すると防除が困難になるので初期防除に努める。薬液は葉裏にも十分に付着するように丁寧に散布する。

タバココナジラミ(バイオタイプB, バイオタイプQ)

1) 予報内容

発生量 平年並(前年よりやや少ない)で、発生程度は「少」

2) 予報の根拠

(1)10月後半の巡回調査では、発生圃場率が44.4%、寄生葉率が1.0%であり、ほぼ平年(30.6%、3.6%)並の発生である。

3) 防除上注意すべき事項

- (1) コナジラミ類が発生している苗は使用しない。
- (2) 圃場周辺の雑草は増殖源となるので、除草を徹底する。
- (3) 施設開口部(出入り口, 天窓, ハウスサイド)に0.4mm以下の防虫ネットを被覆し, 昇温抑制のため循環扇を設置するとともに, 紫外線カットフィルム(侵入防止), 黄色粘着紙(誘殺), 光反射マルチ(忌避)等の物理的防除法を活用する。
- (4) 多発すると防除が困難になるので初期防除に努める。薬液は葉裏にも充分に付着するように丁寧に散布する。
- (5) ネオニコチノイド系剤の一部, 及び合成ピレスロイド系剤に対する感受性が低いことが報告されているバイオタイプQに対しては, ジノテフラン, ニテンピラム, ピリダベン, スピロメシフェン, ピリフルキナゾン, デンプン, オレイン酸ナトリウム等の剤が有効であるとされている。
- (6) 薬剤感受性の低下を回避するため, 同一系統の薬剤の連用は避ける。
- (7) 栽培終了後は成虫の施設外への分散を防ぐため, 薬剤防除を行った上で株を切断し, 施設を密閉して蒸し込み, 虫を死滅させる。

冬春ナス

うどんこ病

1) 予報内容

発生量 平年並(前年よりやや少ない)で, 発生程度は「少」

2) 予報の根拠

- (1) 10月後半の巡回調査では, 発生圃場率が16.7%, 発病葉率が 0.3%であり, ほぼ平年(15.9%, 1.7%)並の発生である。

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 発生が多くなってからでは防除が困難になるので, 初期防除に努める。
- (2) 罹病葉は早期に圃場外に持ち出し, 病原菌密度の低下に努める。
- (3) 耐性菌出現の恐れがあるので, 同一系統薬剤の連用は避ける。

すすかび病

1) 予報内容

発生量 平年並(前年並)で, 発生程度は「少」

2) 予報の根拠

- (1) 10月後半の巡回調査では, 発生を認めていない(平年同時期は, 発生圃場率が 7.0%, 発病葉率が 0.5%)。

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 罹病葉は伝染源になるので, できるだけ早く摘み取って, ハウス外で処分する。
- (2) 発生が多くなると防除が困難になるので初期防除に努める。薬液は下葉の葉裏にも充分付着するように丁寧に散布する。
- (3) 耐性菌出現の恐れがあるので, 同一系統薬剤の連用は避ける。

アブラムシ類

1) 予報内容

発生量 平年並(前年並)で, 発生程度は「少」

2) 予報の根拠

- (1) 10月後半の巡回調査では, 発生を認めていない(平年同時期は, 発生圃場率が 1.7%, 寄生葉率が 0.0%)。

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 多発すると防除が困難になるので初期防除に努める。アブラムシ類は葉裏や芯芽に寄生しているので, 薬液は葉裏にも充分付着するように丁寧に散布する。

ハダニ類

1) 予報内容

発生量 平年並(前年よりやや多い)で、発生程度は「少」

2) 予報の根拠

(1) 10月後半の巡回調査では、発生圃場率が16.7%で、平年(1.7%)と比べてやや高めの発生であるが、寄生葉率は0.2%で、平年(0.1%)並の発生である。

3) 防除上注意すべき事項

(1) 多発すると防除が困難になるので初期防除に努める。ハダニ類は葉裏に寄生しているので、薬液が葉裏にも充分付着するように丁寧に散布する。

ミナミキイロアザミウマ

1) 予報内容

発生量 平年よりやや少なく(前年より少ない)、発生程度は「少」

2) 予報の根拠

(1) 10月後半の巡回調査では、発生圃場率が50.0%、寄生葉率が6.8%と被害果率が1.0%であり、平年(74.1%, 15.6%, 1.6%)と比べてやや低めの発生である。

3) 防除上注意すべき事項

(1) 多発すると防除が困難になるので初期防除に努める。

コナジラミ類(オンシツコナジラミ, タバココナジラミバイオタイプB, タバココナジラミバイオタイプQ)

1) 予報内容

発生量 平年並(前年よりやや少ない)で、発生程度は「少」

2) 予報の根拠

(1) 10月後半の巡回調査では、発生圃場率が100%で、平年(46.7%)と比べて高めの発生であるが、寄生葉率は3.2%で、平年(8.4%)と比べてやや低めの発生である。

3) 防除上注意すべき事項

(1) 多発すると防除が困難になるので初期防除に努める。薬液は葉裏にも充分に付着するように丁寧に散布する。

秋冬ダイコン

アブラムシ類

1) 予報内容

発生量 平年並(前年並)で、発生程度は「少」

2) 予報の根拠

(1) 10月後半の巡回調査では、発生を認めていない(平年同時期は発生圃場率が25.9%、発生程度指数が0.6)。

(2) 10月30日発表の1か月予報では、天気は平年に比べ晴れの日が少ないと見込まれている。また、気温は平年並か高く、降水量は平年並か多く、日照時間は平年並か少ないと予想されており、発生に中間的な気象条件である。

3) 防除上注意すべき事項

(1) 多発すると防除が困難になるので初期防除に努める。

アブラナ科野菜共通

黒腐病

1) 予報内容

発生量 平年並(前年よりやや少ない)で、発生程度は「少」

2) 予報の根拠

(1) 10月前半の巡回調査では、発生を認めていない(平年同時期は発生圃場率が11.1%、発病度が0.4)。

(2) 10月30日発表の1か月予報では、天気は平年に比べ晴れの日が少ないと見込まれている。また、気温は平年並か高く、降水量は平年並か多く、日照時間は平年並か少ないと予想されており、やや発生助長的な気象条件である。

3) 防除上注意すべき事項

(1) 多発すると防除効果が見られなくなるので、発病前から定期的に薬剤を散布して予防する。

(2)害虫による食害痕も病原菌の侵入口となるので、害虫の防除も確実にこなう。

アブラムシ類

1) 予報内容

発生量 平年並(前年よりやや多い)で、発生程度は「少」

2) 予報の根拠

(1)10月後半の巡回調査では、発生圃場率が65.0%、寄生株率が9.0%であり、ほぼ平年(56.1%、9.6%)並の発生である。

(2)10月30日発表の1か月予報では、天気は平年に比べ晴れの日が少なく見込まれている。また、気温は平年並か高く、降水量は平年並か多く、日照時間は平年並か少ないと予想されており、発生に中間的な気象条件である。

3) 防除上注意すべき事項

(1)多発すると防除が困難になるので初期防除に努める。

コナガ

1) 予報内容

発生量 平年よりやや多く(前年よりやや多い)、発生程度は「少」

2) 予報の根拠

(1)10月後半の巡回調査では、発生圃場率は20.0%、10株当たり寄生幼虫及び蛹数が0.42頭であり、平年(11.0%、0.1頭)と比べてやや高めの発生である。

(2)10月30日発表の1か月予報では、天気は平年に比べ晴れの日が少なく見込まれている。また、気温は平年並か高く、降水量は平年並か多く、日照時間は平年並か少ないと予想されており、やや発生助長的な気象条件である。

3) 防除上注意すべき事項

(1)多発すると防除が困難になるので初期防除に努める。葉裏に生息しているので、葉液は葉裏にも充分付着するように丁寧に散布する。

(2)薬剤抵抗性獲得の恐れがあるので、同一系統薬剤の連用は避ける。

モンシロチョウ

1) 予報内容

発生量 平年並(前年よりやや多い)で、発生程度は「少」

2) 予報の根拠

(1)10月後半の巡回調査では、発生圃場率が10.0%、寄生幼虫数は0.12頭であり、平年(22.7%、0.3頭)よりやや低めの発生である。

(2)10月30日発表の1か月予報では、天気は平年に比べ晴れの日が少なく見込まれている。また、気温は平年並か高く、降水量は平年並か多く、日照時間は平年並か少ないと予想されており、やや発生助長的な気象条件である。

3) 防除上注意すべき事項

(1)若齢幼虫時の防除に努める。

シロイチモジヨトウ

1) 予報内容

発生量 平年並(前年並)で、発生程度は「少」

2) 予報の根拠

(1)10月後半の巡回調査では、発生を認めていない(平年同時期は、発生圃場率が8.3%、寄生株率が0.6%)。

(2)10月30日発表の1か月予報では、天気は平年に比べ晴れの日が少なく見込まれている。また、気温は平年並か高く、降水量は平年並か多く、日照時間は平年並か少ないと予想されており、やや発生助長的な気象条件である。

3) 防除上注意すべき事項

(1)多発すると防除が困難になるので初期防除に努める。

ハスモンヨトウ

1) 予報内容

発生量 平年並(前年よりやや少ない)で、発生程度は「少」

2) 予報の根拠

- (1) 10月後半の巡回調査では、発生圃場率が20.0%、寄生株率が 1.2%であり、平年(47.0%、4.8%)と比べてやや低めの発生である。
- (2) 10月30日発表の1か月予報では、天気は平年に比べ晴れの日が少ないと見込まれている。また、気温は平年並か高く、降水量は平年並か多く、日照時間は平年並か少ないと予想されており、やや発生助長的な気象条件である。

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 多発すると防除が困難になるので初期防除に努める。

秋冬ネギ

さび病

1) 予報内容

発生量 平年並(前年並)で、発生程度は「少」

2) 予報の根拠

- (1) 10月後半の巡回調査では、発生を認めていない(平年同時期は、発生圃場率が 1.1%、発病株率が 0.0%)。
- (2) 10月30日発表の1か月予報では、天気は平年に比べ晴れの日が少ないと見込まれている。また、気温は平年並か高く、降水量は平年並か多く、日照時間は平年並か少ないと予想されており、やや発生助長的な気象条件である。

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 多発すると防除効果が見られなくなるので、発病前から定期的に薬剤を散布して予防する。
- (2) 肥切れすると発生が多くなるので、適切な肥培管理に努める。

アブラムシ類

1) 予報内容

発生量 平年よりやや少なく(前年よりやや少ない)、発生程度は「少」

2) 予報の根拠

- (1) 10月後半の巡回調査では、発生を認めていない(平年同時期は、発生圃場率が 4.4%、寄生株率が 0.1%)。
- (2) 10月30日発表の1か月予報では、天気は平年に比べ晴れの日が少ないと見込まれている。また、気温は平年並か高く、降水量は平年並か多く、日照時間は平年並か少ないと予想されており、発生に中間的な気象条件である。

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 多発すると防除が困難になるので初期防除に努める。

シロイチモジヨトウ

1) 予報内容

発生量 平年並(前年よりやや少ない)で、発生程度は「少」

2) 予報の根拠

- (1) 10月後半の巡回調査では、発生を認めていない(平年同時期は、発生圃場率が 8.1%、50株あたり寄生虫数が 0.2頭)。
- (2) 10月30日発表の1か月予報では、天気は平年に比べ晴れの日が少ないと見込まれている。また、気温は平年並か高く、降水量は平年並か多く、日照時間は平年並か少ないと予想されており、やや発生助長的な気象条件である。

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 幼虫の齢期が進むと薬剤の効果が著しく低下するので、発生初期に徹底防除する。
- (2) フェロモン剤による交信攪乱効果は設置後3ヶ月程度で低下してくるので、早めに交換する。

ネギハモグリバエ

1) 予報内容

発生量 平年並(前年並)で、発生程度は「中」

2) 予報の根拠

- (1) 10月後半の巡回調査では、発生圃場率が100%、葉の被害度が 8.7であり、ほぼ平年(89.9%, 17.0)並の発生である。
- (2) 10月30日発表の1か月予報では、天気は平年に比べ晴れの日が少ないと見込まれている。また、気温は平年並か高く、降水量は平年並か多く、日照時間は平年並か少ないと予想されており、やや発生助長的な気象条件である。

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 多発すると防除が困難になるので初期防除に努める。
- (2) 被害葉は有力な発生源となるので、圃場周辺に放置せずに、速やかに処分する。

冬レタス

アブラムシ類

1) 予報内容

発生量 平年よりやや少なく(前年並)、発生程度は「少」

2) 予報の根拠

- (1) 10月後半の巡回調査では、発生圃場率が 7.7%、寄生株率が 0.2%であり、平年(24.5%, 1.0%) よりやや低めの発生である。
- (2) 10月30日発表の1か月予報では、天気は平年に比べ晴れの日が少ないと見込まれている。また、気温は平年並か高く、降水量は平年並か多く、日照時間は平年並か少ないと予想されており、発生に中間的な気象条件である。

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 多発すると防除が困難になるので初期防除に努める。

シロイチモジヨトウ

1) 予報内容

発生量 平年並(前年並)で、発生程度は「少」

2) 予報の根拠

- (1) 10月後半の巡回調査では、発生を認めていない(平年同時期は、発生圃場率が 1.7%、寄生株率が 0.1%)。
- (2) 10月30日発表の1か月予報では、天気は平年に比べ晴れの日が少ないと見込まれている。また、気温は平年並か高く、降水量は平年並か多く、日照時間は平年並か少ないと予想されており、やや発生助長的な気象条件である。

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 多発すると防除が困難になるので初期防除に努める。

ハスモンヨトウ

1) 予報内容

発生量 平年並(前年並)で、発生程度は「少」

2) 予報の根拠

- (1) 10月後半の巡回調査では、発生圃場率が15.4%、寄生株率が 0.3%であり、ほぼ平年(8.0%, 0.3%)並の発生である。
- (2) 10月30日発表の1か月予報では、天気は平年に比べ晴れの日が少ないと見込まれている。また、気温は平年並か高く、降水量は平年並か多く、日照時間は平年並か少ないと予想されており、やや発生助長的な気象条件である。

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 多発すると防除が困難になるので初期防除に努める。

冬春ハウレンソウ

べと病

1) 予報内容

発生量 平年並(前年並)で、発生程度は「少」

2) 予報の根拠

- (1) 10月後半の巡回調査では、発生を認めていない(平年同時期も未発生)。
- (2) 10月30日発表の1か月予報では、天気は平年に比べ晴れの日が少なく見込まれている。また、気温は平年並か高く、降水量は平年並か多く、日照時間は平年並か少ないと予想されており、やや発生助長的な気象条件である。

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 病原菌は被害株についたまま越冬し、春になると分生胞子を形成して伝染源となる。春先の発生を抑制するために、薬剤を予防的に散布して再発を防止する。
- (2) 罹病株を圃場に放置すると、被害植物体内で形成された卵胞子が土中で越冬して、次作の第一次伝染源となるので、発病株は速やかに処分する。
- (3) 葉が繁茂して軟弱となると被害が多いので、肥培管理に注意する。

アブラムシ類

1) 予報内容

発生量 平年並(前年並)で、発生程度は「少」

2) 予報の根拠

- (1) 10月後半の巡回調査では、発生圃場率が25.0%、発生程度指数が0.5であり、ほぼ平年(19.0%、0.7)並の発生である。
- (2) 10月30日発表の1か月予報では、天気は平年に比べ晴れの日が少なく見込まれている。また、気温は平年並か高く、降水量は平年並か多く、日照時間は平年並か少ないと予想されており、発生に中間的な気象条件である。

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 多発すると防除が困難となるので初期防除に努める。

冬春イチゴ

うどんこ病

1) 予報内容

発生量 平年並(前年並)で、発生程度は「少」

2) 予報の根拠

- (1) 10月後半の巡回調査では、発生を認めていない(平年同時期は、発生圃場率が1.5%、発病葉率が0.03%)。
- (2) ビニール被覆後は発病好適環境となるため、増加するものと予想される。

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 発生が多くなってからでは防除が困難になるので初期防除に努める。
- (2) 罹病葉は伝染源になるので、見つけ次第圃場外に持ち出し、病原菌密度の低下に努める。
- (3) 古葉を早めに除去し、葉裏に薬液が十分かかるように丁寧に散布する。
- (4) 耐性菌出現の恐れがあるので、同一系統薬剤の連用は避ける。

炭そ病

1) 予報内容

発生量 平年並(前年並)で、発生程度は「少」

2) 予報の根拠

- (1) 10月後半の巡回調査では、発生圃場率が7.1%であり、平年(17.1%)と比べてやや低めの発生である。
- (2) ビニール被覆後は発病好適環境となるため、発生が増加するものと予想される。

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 発生が多くなってからでは防除が困難になるので初期防除に努める。
- (2) 従来型炭そ病の場合は、萎凋症状が止まっているようでも、ビニール被覆後に枯死することが多い

ので、罹病葉は見つけ次第除去し、苗があれば植えかえる。

- (3)葉枯性炭そ病の場合は、早目に病葉を除去し、アミスター20フロアブル等、効果が高い薬剤で集中的に防除を行なう。

アブラムシ類

1) 予報内容

発生量 平年並(前年よりやや少ない)で、発生程度は「少」

2) 予報の根拠

- (1)10月後半の巡回調査では、発生圃場率が28.6%、寄生株率が3.4%であり、平年(31.1%、3.7%)並の発生である。

3) 防除上注意すべき事項

- (1)多発すると防除が困難になるので初期防除に努める。アブラムシ類は葉裏や芯芽に寄生しているので、薬液は葉裏にも充分付着するように丁寧に散布する。

ハダニ類

1) 予報内容

発生量 平年並～やや多く(前年よりやや多い)、発生程度は「少～中」

2) 予報の根拠

- (1)10月後半の巡回調査では、発生圃場率が35.7%で、平年(32.1%)並の発生であるが、寄生葉率は4.1%で、平年(2.9%)と比べてやや高めの発生である。

3) 防除上注意すべき事項

- (1)多発すると防除が困難になるので初期防除に努める。ハダニ類は葉裏に寄生しているので、薬液が葉裏にも充分付着するように丁寧に散布する。
(2)薬剤抵抗性獲得の恐れがあるので、同一系統薬剤の連用は避ける。

野菜共通

オオタバコガ

1) 予報内容

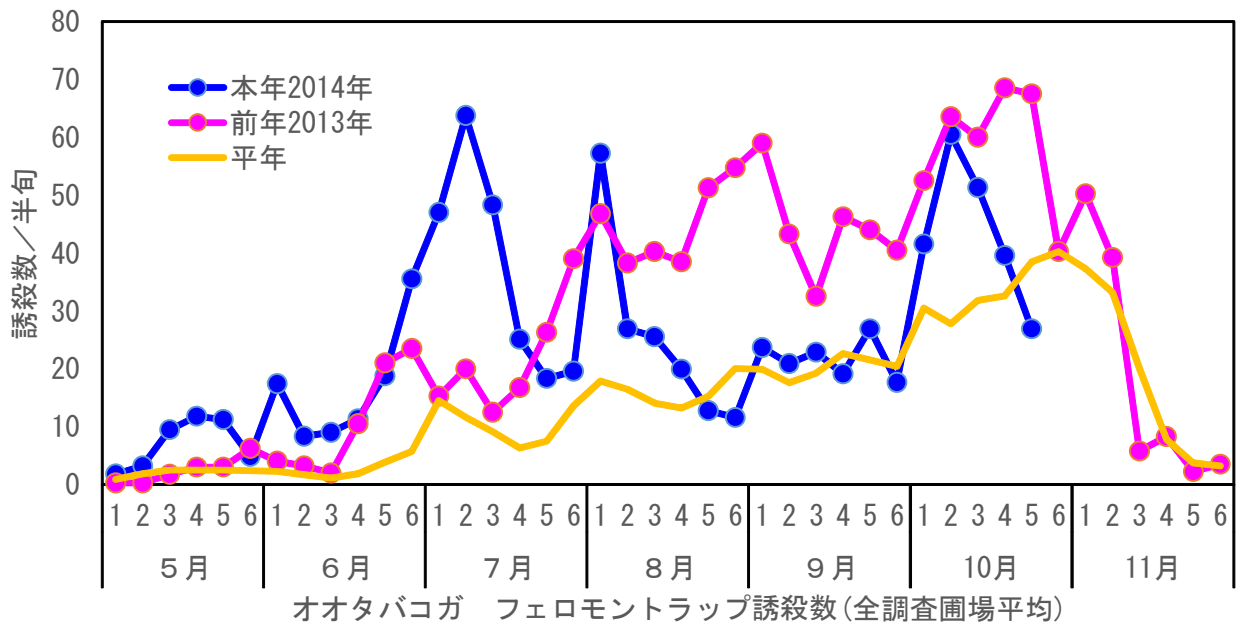
発生量 平年並(前年よりやや少ない)で、発生程度は「少～中」

2) 予報の根拠

- (1)10月1～3半旬のフェロモントラップへの誘殺虫数(調査9圃場の平均)は153頭であり、平年(90頭)よりやや多めに推移したが、その後、平年並となった。
(2)10月30日発表の1か月予報では、天気は平年に比べ晴れの日が少ないと見込まれている。また、気温は平年並か高く、降水量は平年並か多く、日照時間は平年並か少ないと予想されており、やや発生助長的な気象条件である。

3) 防除上注意すべき事項

- (1)幼虫食入後は薬剤の効果がないので、結球野菜は結球直前までに、使用基準に基づき必ず薬剤防除を行なう。



II. その他

1. 薬剤の使用に当たっては、必ず農薬ラベル記載事項を遵守してください。

発生量の表示

発生程度：甚>多>中>少>無

発生量：多い>やや多い>並>やや少ない>少ない

徳島県立農林水産総合技術支援センター病害虫防除所
 URL : <http://www.pref.tokushima.jp/tafftsc/t-boujoso/>

○ 病害虫の発生予察情報, 発生状況, 防除法等をお知らせしています。